

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 16 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25244044

研究課題名(和文) 帝国日本のモノと人の移動に関する人類学的研究 台湾・朝鮮・沖縄の他者像とその現在

研究課題名(英文) An Anthropological Study of the Flow of Goods and People in Imperial Japan: The Images of Others and Their Present Situations in Taiwan, Korea and Okinawa

研究代表者

植野 弘子 (UENO, Hiroko)

東洋大学・社会学部・教授

研究者番号：40183016

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 29,400,000円

研究成果の概要(和文)：帝国日本における人とモノの移動とそこに生まれた他者像について、フィールドワークと文字資料研究を行った。

帝国日本における宗主国と植民地との近似性と近接性に注目し、移動の容易さ、同質化への志向を指摘し得た。植民地の近代化に関しては、帝国内の各地での多様な解釈を、モノを視点として検討した。植民地間での移動については、特に台湾-沖縄、朝鮮半島-台湾に関して資料を蓄積している。また、帝国日本内の移動についての検討には、帝国日本の外部とのつながりを視野に入れる必要性が、本研究を通じて明確なものとなった。

研究成果の概要(英文)： The flow of goods and people and the images of others in Imperial Japan have been researched based on the fieldwork and documentary records materials.

Focusing on the approximation and vicinity between the suzerain and colonies, the ease of flow and the intention of assimilation should be pointed. The variation of interpretation for the colonial modernity among these areas: Taiwan, Korea and Okinawa, is discussed based on the investigation of goods. Concerning the flow between the colonies, especially Taiwan-Okinawa and Korea-Taiwan, research data has been accumulated. Through this research, it should be clearly noted that the analysis of the flow in Imperial Japan needs to be considered along with external connections.

研究分野：人文学

キーワード：文化人類学 帝国日本 移動 モノ 植民地主義 台湾 朝鮮 沖縄

1. 研究開始当初の背景

帝国日本による植民地統治は、宗主国と植民地、また植民地同士の人々の出会い、またモノの交流を生み出していた。そこで生まれた「他者像」は、今の我々が他者を見る視線にいかに関与しているかという問いから、本研究は始まっている。本研究は、帝国日本のもとで、日本本土と植民地、植民地間の関係性において作られ、また運ばれ、生活のなかに根付いたモノの社会経済的背景、その文化的表象を明らかとし、さらにそのモノに込められた他者認識や自己認識のダイナミックスを、植民地期から現在に亘って考察するものである。

本研究の発想は、台湾における植民地主義に関する人類学的研究にある。人類学の植民地主義研究では、支配者として優位なる宗主国と被支配者として劣位にある植民地といった二者対立的な構図では捉えきれない事象や人々の思考・行為に視線を注ぎ、宗主国と被支配者のもつれ合いの中で宗主国自身の文化も被支配者の文化も構築されることを論議してきた。台湾においても、被支配者となった台湾の人々が植民地経験を主体的に操作し、「日本」が社会的状況の下で変容しながら利用されていくことを、植民地期から現在まで通時的かつ多面的に明らかにした(植野弘子・三尾裕子編、『台湾における<植民地>経験 日本認識の生成・変容・断絶』風響社、2011年)。

また、日本の植民地支配には、西洋列強の植民地支配にはない、「近隣性」と「近似性」とが存在し、このため、「文明化」した西洋列強が絶対的に優位な他者として、「未開」の地に福音をもたらすとして行なう植民地支配による他者像とは異なる相互認識があることも、鮮明なものとなった。新たな統治者日本は、進んだ「文明」をもたらすものとして単純に受け止められる存在ではなかった。同じ東アジアの中にあり、倫理面でも、物質文化でも共通性のある宗主国と植民地の間、植民地同士の間でのモノの移入や混淆は容易だったが、モノへの認識については自他を明確に区分できない複雑さを生んだ。一方で、日本は、植民地に西洋の「近代化」を装った統治制度、産業、生活習慣等を持ち込み、これらに付随するモノも生活の中に埋め込んだ。こうして生活世界に形成された新たなモノは植民地支配終了後各地で異なる歴史を経る。だが、こうしたモノが、戦後、いかに維持・変容するかを他者像とともに追う研究は、「植民地近代」とその後を考える課題でありながら、十分にはなされていなかった。

さらに、「帝国日本」の他者像を考察するには、帝国を枠組みとした人の移動に注目する必要がある。宗主国から官吏や植民者が植民地に、対して植民地から宗主国にも労働・就学などのために人が移動するが、それのみならず、植民地間においても商人、労働者あるいは兵士として人の移動が行われ、そこに

帝国の世界が構築された。日本の植民地におけるこうした移民とその現代的問題として、研究分担者である崔吉城は、『樺太朝鮮人の悲劇 サハリン朝鮮人の現在』(第一書房、2007年)において、戦前のサハリンでの朝鮮人・日本人・ロシア人の混住状況、ソ連の参戦によって起こる混乱の中での日本人による朝鮮人虐殺、戦後も帰郷できなかった朝鮮人、そしてようやく戻った人々と現代韓国社会との摩擦を描き、日本の植民地支配によって引き起こされ今に続く問題を提示している。こうした視点と綿密な調査研究が、他の植民地に関して必要でありながら、台湾・朝鮮半島への他の植民地からの人の移動についての研究は十分なものではなかった。台湾においても、日本本土からの官吏や植民者などだけでなく、沖縄や朝鮮半島から労働者が来ており、また中国大陸からも多くの人が渡台している。これまでのような「日本 - 台湾」、つまり「宗主国とある一植民地」という構図では、植民地世界を理解することはできない。台湾と朝鮮半島、台湾と准植民地としての沖縄の関係など、こうした地域の間でのモノの移動、人の移動の過程とそこで生み出される新たなモノに注目し、この視点でもって、植民地支配が覆った「帝国日本」の実態を考察することが求められていた。

2. 研究の目的

日本の植民地となった台湾や朝鮮半島、また准植民地ともいべき沖縄においては、日本による統治ゆえに新たなモノ(たとえば近代西洋建築物や畳など)が持ち込まれ、あるいは創造され、さらに宗主国日本と植民地の間で、また植民地間で人が移動し、それまでにない他者との出会いが生まれた。本研究の目的は、このような帝国日本におけるモノと人の移動に着目し、そこに生み出された他者像を、人々の生活世界に視点を置いて分析し、植民統治期を超えて現在に至る東アジアの他者認識のダイナミックスを明らかにすることにある。さらに、文化的に近似性をもつ東アジア内の宗主国と植民地の関係性、植民地間の関係性に注目することにより、本研究は、西洋列強の植民地主義の検討に基づく従前の人類学的研究に新たな展開をもたらすことを目指すものである。

具体的には、以下の4点を明らかにすることとした。

(1) 植民地期の台湾・朝鮮半島、また沖縄の人々の生活のなかで、植民地支配によって生み出されたモノ、帝国内の他の地域からもたらされたモノについて、その生産・流通の実態と、人々のそれらに対する評価・イメージをさぐり、そこに現れる他者像を明らかとしていく。

(2) 上記(1)の研究成果をふまえて、植民地支配終了後におけるモノとそのイメージの変容についての調査研究を行い、植民地

期と繋がる現在の人々の他者イメージを明らかにしていく。特に台湾と韓国における比較研究においては、その政治的社会的背景の差異に注目して分析し、他者像を造り出す要素をより明確にしていく。また、この過程において、これまで研究が十分ではなかった、終戦後から1950年代までの旧植民地における日本の影響や植民地支配の残存状況が明らかになっていくことが期待できる。

(3) 植民地期の人々の移動についてこれまで注目されていなかった、植民地間の人々の移動の実態に関する資料収集と分析を行い、宗主国の人々、植民地の人々の多様な集団が構成し、それぞれが交流しあるいは隔絶して存在する植民地の生活世界の実像を提示していく。これによって、人口移動とともにもたらされたモノや慣習、知見を考察し、そこに現れる他者像を明らかとする。

(4) 近似性・近隣性を有する宗主国による植民地統治とその後の関係性を考察することによって、「帝国日本」の特異性に対する考察を行い、西洋列強の植民地支配から考察してきた従前の人類学の植民地主義研究・ポストコロニアル研究とは異なる、新たな視座を提供することを目指す。

3. 研究の方法

帝国日本におけるモノと人の移動から台湾・朝鮮半島・沖縄にみられる他者像とそのダイナミクスを考察する本研究の目的を達成するため、以下の方法で研究を進めた。

(1) 研究メンバーは、各自のテーマにしたがって、フィールドでの聞き取り調査、文献史料収集を遂行し、それに基づいて考察を進めた。

(2) メンバーは、これまでの自らの調査地のみならず、全員が本研究の対象とする台湾・韓国・沖縄に赴いて現地状況に対して理解を深めることを目指し、第1年目2014年2月には沖縄八重山地域で、第2年目2015年8月には韓国、そして第3年目2015年12月には台湾において、共同調査を遂行した。その際には、いずれも現地研究者を交えたフォーラムを開催し、当該地域の研究者・研究機関との交流を図った。

(3) 研究会を、合わせて11回開催し、メンバーの研究報告のみならず、関連する研究者を招いて討議を行い、課題の深化を計った。

(4) 最終年度にあたる2017年12月3-4日には、国際シンポジウム「帝国日本における人とモノの移動と他者像 台湾・朝鮮・沖縄を基点に」を開催し、メンバーの研究成果の公開を行い、討議を通じて課題を深化させた。

(5) これまでの研究成果を基に、論文の執筆を行い、書籍として公刊するための準備を進めている。

4. 研究成果

研究開始当時の研究目的を明らかにするべく、研究を進めるなかで課題の整理を繰り返し、帝国日本における人とモノの移動とそこに生まれる他者像に関して、以下の論点について考察を進めた。

(1) 帝国日本内の近似性・近接性

帝国日本においては、宗主国と植民地の間での近似性・近接性をもつことを特徴としているが、このことは、双方の民衆レベルにおいても他者と出会うという状況を生み出している。日本的とされるモノの展開・定着(日本式表札などに関する角南の研究)や日本的なものへの「感化」・同質化の想定(商社活動に関する谷ヶ城の研究)について具体的検討がされている。

(2) 近代化を視点とした他者認識

日本による植民地統治は、植民地に産業の近代化を計るとともに、近代的制度や近代的なモノを持ち込むことになった。こうしたモノに対する植民地の人々の評価、そして植民地統治の終了後にそれはいかに継続変化してきたのかが課題となる。近代的なモノとそれを持ち込んだ日本に対する評価の変遷(台湾の近代的日用品に関する植野の研究)が検討され、また日本の持ち込んだ「近代」への評価の地域的差異(西洋近代建築物に関する上水流による比較研究)が指摘されている。

(3) 植民地間での移動と他者認識

宗主国と植民地との関係だけではなく、植民地と植民地の間の関係性を捉え、それによって、帝国内の移動を全体的に捉えることを一つの課題としてきた。これまで研究が未着手ともいえた台湾と宮古地方との間での人の移動についての貴重な資料が収集されている(宮古の台湾人に関する松田の研究)。また、朝鮮半島への中国からの人の移動と、その人々と子孫である韓国華僑の現在に至る移動についての資料収集が、韓国と台湾の共同調査などを通じて行われている。

(4) 帝国日本を越えた関係性の検討

帝国日本における移動を考える際に、本研究で基点とした台湾・朝鮮半島・沖縄だけではなく、中国との間での移動について考察の必要性のあることは、本プロジェクト研究開始以前にも想定されていた。中国からの人の動きとモノの伝播(粉食中華の定着に関する林史樹の研究、韓国華僑の研究)については、資料収集と分析が進んでいる。また、台湾における日本統治に際して、西洋化を導入した清帝国の制度と日本の制度の転換(日本統治期の税関制度に関する林玉茹の研究)など複数の帝国を視点とした研究が必要なが明らかとなってきた。さらに、帝国日本以外とのモノの移動(パイン産業に関する八尾の研究)、帝国日本を越えて活動する人の動き(日本人人類学者に関する全の研究)を視野に入れなければ、帝国日本の移動を考察しえないことが明確になったことも、一つの研究成果である。

(5) 帝国日本の移動と他者像への研究視角
本研究を通じて、西洋列強の植民地主義に関する研究に基づいたこれまでの人類学研究を越えることを目指し、そのために帝国日本の移動と他者像を捉える研究方法の検討も行った。帝国日本期の生活の語りに基づく植民地世界の描き方の検討(植民地朝鮮のライフヒストリーに関する鈴木の研究)、帝国支配のなかで植民地であった場における旧帝国の出身者である研究者の視点のバイアスの指摘(インタビュー資料・映像記録資料の利用に関する崔による研究)は、今後の東アジアでの人類学研究に刺激を与える成果といえよう。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 11件)

林玉茹、「日據時期臺灣的税關資料及其運用」、『国家航海』、査読有、16、2016、81-121。

林史樹、「朝鮮半島における“薬食同源”」、『Vesta 食とからだ・こころ』、査読無、102、2016、30-33。

34 林史樹、「戦争期にともなう食の伝播に関する一考察 韓国における粉食を中心に」、『神田外語大学紀要』、査読無、28、2016、311-325。

全京秀、「伊能嘉矩の臺灣研究に関する方法論的再検討 <巡臺日乗>(1897年)の精讀を通して」、『歴史と民俗』、査読有、32、2016、215-254。

全京秀、「A Trial of the History of Anthropology in Taiwan during the Japanese Occupation: Focusing on INOU Kanori, UTSURIKAWA Nenzo, and KANASEKI Takeo」、『*South Pacific Studies*』、査読有、36(2)、2016、79-102。

角南聡一郎、「アジアにおける日本人墓標の諸相 - その記録と研究史」、『人文学報』、査読有、108、2015、3-20。

上水流久彦、「The Way History is Told in Taiwan: Reassessing a Survey in Taipei」、『*Notandum*』、査読有、39、2015、83-98。

林玉茹、「Management and Experiments of A Colonial Industry : Japanese official-run fishermen migration project in Taiwan during the late Meiji years」、『*Journal of Overseas Chinese Studies Connections and Comparisons in East Asia*』、査読無、9 Special Issue、2015、94-141。

八尾祥平、「琉球華僑という窓から戦後史を捉えなおす」、『ワセダアジアレビュー』、査読有、15、2014、72 - 77。

八尾祥平、「戦後台湾をめぐる『反共のネットワーク』と人の移動 中国大陸災胞救済総会を中心に」、『次世代アジア論集』、査読有、7、2014、149 - 163。

林玉茹、「殖民地的産業治理與摸索 - 明治末年臺灣的官營日本人漁業移民」、『新史學』、査読有、24(3)、2013、95-133。

[学会発表](計 34件)

林玉茹、「The Customs of Taiwan during the Japanese Occupation: Window of Control」、『The 14th Annual Conference of European Association of Taiwan Studies』、2017年3月2-4日、ベニス(イタリア)

林史樹、「日本統治下の朝鮮における洋食の導入と普及に関する一考察」、『国際シンポジウム「第6回アジア食文化会議(垂州食学論壇)」』、2016年12月4日、立命館大学(滋賀県草津市)。

林史樹、「戦前・戦後期にみられた東アジアにおける「中華」の拡散 - 日韓両地域での粉食定着を中心に」、『国際シンポジウム「帝国日本における人とモノの移動と他者像 台湾・朝鮮・沖縄を基点に」』、2016年12月3日、東洋大学(東京都)。

角南聡一郎、「日式表札の成立と越境 - 旧日本植民地における持続と変容を中心に」、『国際シンポジウム「帝国日本における人とモノの移動と他者像 - 台湾・朝鮮・沖縄を基点に」』、2016年12月3-4日、東洋大学(東京都)。

八尾祥平、「消え去ろうとしない帝国日本の「影」 沖縄のパイナップル生産にみる人とモノの移動を中心に」、『国際シンポジウム「帝国日本における人とモノの移動と他者像 台湾・朝鮮・沖縄を基点に」』、2016年12月3-4日、東洋大学(東京都)。

全京秀、「鹿野忠雄の学問の展開過程から学ぶ「移動」 - 台湾から東南アジアまで」、『国際シンポジウム「帝国日本における人とモノの移動と他者像 台湾・朝鮮・沖縄を基点に」』、2016年12月3-4日、東洋大学(東京都)。

林玉茹、「帝国人、貨的移動控管の窓口 日治時期台湾的税関」、『国際シンポジウム「帝国日本における人とモノの移動と他者像 台湾・朝鮮・沖縄を基点に」』、2016年12月3-4日、東洋大学(東京都)。

松田良孝、「沖縄宮古地方の台湾系住民をめぐる植民地期から現在までの記憶の断裂と散在 八重山地方との比較にその遠因を探る」、『国際シンポジウム「帝国日本における人とモノの移動と他者像 台湾・朝鮮・沖縄を基点に」』、2016年12月3-4日、東洋大学(東京都)。

上水流久彦、「新たな「日本」研究の場としての台湾」、『2016年世新60「日本学」国際学術研討会』、2016年11月5日、世新大学(台湾・台北市)。

鈴木文子、「植民という日常 ライフ・ヒストリーのなかの植民地朝鮮の語られ方・描き方」、『東京大学コリア・コロキウ

- アム(2016年度第2回講演)、2016年10月28日、東京大学本郷キャンパス(東京都)。
- 角南聡一郎、「タグリ神の研究 石造品領有に注目して」、日本民俗学会第68回年会、2016年10月2日、千葉商科大学(千葉市)。
- 角南聡一郎、「唐(韓)物と民具 外来と在来の技術に関する一試論」、日韓共同学会議(国際学会)、2016年8月6-8日、福崎町エルデホール(兵庫県)。
- 角南聡一郎、「近現代日本の外来系背負梯子 在日の物質文化研究に向けて」、日本文化人類学会第50回研究大会、2016年5月29日、南山大学(名古屋市)。
- 上水流久彦、「台湾の中国人観光客を巡る観光の政治学 ネーションなのか、感情なのか」、日本文化人類学会第50回研究大会、2016年5月29日、南山大学(名古屋市)。
- 角南聡一郎、「赤松啓介と物質文化 民俗学と考古学の連環を考えるために」、岡山民俗学会総会・研究発表大会、2016年4月24日、岡山市立中央公民館(岡山市)。
- 林玉茹、「日治時期臺灣的税關資料及其運用」、中國海關史與海關文獻國際研究中心主催「海關文獻與近代中國學術研討會」(開場主題演講)、2016年2月27日、復旦大學(中国・上海市)。
- 角南聡一郎、「表札盗みの迷信 墓標打ち欠きとの関連から」、第40回日本民具学会大会、2015年12月13日、茨城県立歴史館(水戸市)。
- 角南聡一郎、「旧日本植民地に遺された文化 台湾・韓国の日式表札」、日本民俗学会第67回年会、2015年10月11日、関西学院大学(兵庫県西宮市)。
- 林玉茹、「向朝鮮或臺灣出魚? 明治末年植民地臺灣的官營日本人漁業移民」、韓國高麗大學民族文化研究院主催「日帝植民地經濟的比較國際學術研討會」、2015年9月11-12日、高麗大学(韓国・ソウル市)。
- 上水流久彦、「台湾の植民地期建築物をめぐる植民地経験の多相化 韓国・旧南洋群島との比較から」、日本文化人類学会第49回研究大会、2015年5月30日、大阪国際交流センター(大阪市)。
- ②① 林玉茹、「Communication and Trade: The Message Transmission of Jiao Merchants in Taiwan and Ningbo at the End of the Nineteenth Century」、International Workshop on Network and Communication in East Asia and Beyond in the 19th and Early 20th Centuries、2015年3月5-7日、ロンドン(イギリス)。
- ②② 上水流久彦、「台湾人の八重山観光」、日本台湾学会第12回関西西部会研究大会、2014年12月20日、神戸学院大学(神戸市)。
- ②③ 角南聡一郎、「Gravestones decorated with portraits of the deceased」、第四屆南瀛研究國際學術研討會「南瀛の社會與生活」、2014年10月19日、国立台湾歷史博物館(台湾・台南市)。
- ②④ 全京秀、「日本人類學史における薩南派の活動と地位 田代安定から國分直一まで」、鹿児島民俗學會、2014年10月12日、黎明館(鹿児島市)。
- ②⑤ 全京秀、「WWII Anthropology, American Association for the Advancement of Science, Pacific Division, Annual Meeting、2014年6月19日、University of California, Riverside(米国)。
- ②⑥ 角南聡一郎、「Changes in Burial Customs of Taiwanese Aborigines and Their Identity」、IUAES(International Union of Anthropological and Ethnological Sciences)2014、2014年5月18日、幕張メッセ(千葉市)。
- ②⑦ 上水流久彦、「八重山と台湾との境域にみる記憶の継承 「空間」と「場所」、「中央」と「周辺」のせめぎ合い」、日本文化人類学会第48回研究大会、2014年5月17日、幕張メッセ(千葉市)。
- ②⑧ 八尾祥平、「戦後台湾をめぐる『反共のネットワーク』と人の移動 中国大陸災胞救済総会の動向を中心に」、早稲田大学アジア研究機構「2013年度次世代研究大会」、2014年1月28日、早稲田大学(東京都)。
- ②⑨ 八尾祥平、「關於戦後琉球華僑的歷史社會學的分析」、第14屆中琉歷史關係國際學術會議、2013年11月29日、中央研究院人文社會科學研究中心(台湾・台北市)。
- ③⑩ 崔吉城、「記録と記憶」、歴博映画祭「映像民族学の先駆者たち 澁澤敬三と宮本馨太郎」(招待講演)、2013年11月24日、国立歴史民俗博物館(千葉県・佐倉市)。
- ③⑪ 谷ヶ城秀吉、「帝国日本における海上交通網の変容と流通機構」、史学会第111回大会公開シンポジウム「帝国とその周辺」、2013年11月9日、東京大学(東京都)。
- ③⑫ 林史樹、「食物在戦争时期的傳播与变化: 炸醬麵從中国到韓国」、亞洲食學論壇第3回、2013年10月27日、紹興飯店(中国・浙江省)。
- ③⑬ 八尾祥平、「琉球華僑にとっての『戦後』沖繩の社會変容」、日本都市社會学会第31回大会、2013年9月14日、熊本大学(熊本市)。
- ③⑭ 角南聡一郎、「説話伝承とモノ - 墓(墓標・五輪塔・石棺など)にまつわるアジアの説話伝承を通じて -」、アジア民族文化学会春季大会第25回大会、2013年5月11日、共立女子大学(東京都)。

〔図書〕(計 20件)

植野弘子、慶應義塾大学出版会、三尾裕子・遠藤央・植野弘子編『帝国日本の記憶 台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』、2016、291(145-181)。

上水流久彦、慶應義塾大学出版会、三尾裕子・遠藤央・植野弘子編『帝国日本の記憶 台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』、2016、291(261-288)。

上水流久彦、森和社、小熊誠編『<境界>を超える沖縄』、2016、312(87-116)。

八尾祥平、森和社、小熊誠編『<境界>を超える沖縄』、2016、312(105-136)。

全京秀、Bonn: Bier'sche Verlagsanstalt, Ishikawa Hideshi, Josef Kreiner, Sasaki Ken'ichi and Yoshimura Takehiko(eds.) *Origins of Oka Masao's Anthropological Scholarship*, 2016, 242(129-152)。

崔吉城、民俗苑、『植民地歴史を正しく見る』、2016、343。

崔吉城、岩波書店、宮本瑞夫・佐野賢治・北村皆雄編『甦る民俗映像 洪沢敬三と宮本馨太郎が撮った一九三〇年代の日本・アジア』(DVDブック)、2016、480(181-196)。

⑧ 角南聡一郎、臺南市政府文化局、林玉茹・植野弘子・陳恒安編『南瀛歴史、社會與文化・IV - 社會與生活 - 』、2016、318(217-240)。

全京秀、勉誠出版、石井正己編『博物館という装置』、2016、416(20-53)。

崔吉城、ハート出版、『韓国の米軍慰安婦はなぜ生まれたか』、2014、208。

上水流久彦、交隣舎、永留史彦・上水流久彦・小島武博編著『対馬の交隣』、2014、200(41-53、140-151)。

谷ヶ城秀吉、日本経済評論社、須永徳武編『植民地台湾の経済基盤と産業』、2015、420(93-128)。

谷ヶ城秀吉、東京大学出版会、歴史科学協議会編『歴史の「常識」をよむ』、2015、224(202-205)。

林玉茹、London: Pickering & Chatto, Lin Yuju and Madeline Zelin eds., *Merchant Communities in Asia 1600-1980*, 2015、246(11-289)。

全京秀、ソウル大学出版会『泉靖一と軍閥人類学』、2015、120。

八尾祥平、ミネルヴァ書房、谷富夫編著『持続と変容の沖縄社会』、2014、320(132-153)。

八尾祥平、風響社、谷垣真理子編著『変容する華南と華人ネットワークの現在』、2014、506(305-330)。

全京秀、東京堂出版、ヨーゼフ・クライナー編『日本とはなにか - 日本民族学の二〇世紀』、2014、352(296-347)。

角南聡一郎、春風社、片岡樹・シンジルト・山田仁史編『アジアの人類学』、2013、339(211-244)。

八尾祥平、勉誠出版、蘭信三編著『帝国以後の人の移動 ポストコロナリズムとグローバルリズムの交差点』、2013、1000(595-623)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

植野 弘子 (UENO, Hiroko)

東洋大学・社会学部・教授

研究者番号: 40183016

(2) 研究分担者

崔 吉城 (CHOE, Kilsung)

東亜大学・人間科学部・教授

研究者番号: 80236794

鈴木 文子 (SUZUKI, Fumiko)

仏教大学・歴史学部・教授

研究者番号: 40252887

角南 聡一郎 (SUNAMI, Soichiro)

公益財団法人元興寺文化財研究所・研究部・主任研究員

研究者番号: 50321948

上水流 久彦 (KAMIZURU, Hisahiko)

県立広島大学・地域連携センター・准教授

研究者番号: 50364104

谷ヶ城 秀吉 (YAGASHIRO, HIDEYOSHI)

専修大学・経済学部・准教授

研究者番号: 30508388

八尾 祥平 (YAO, SHOHEI)

神奈川大学・経済学部・講師

研究者番号: 90630731

(3) 連携研究者

林 史樹 (HAYASHI, Fumiki)

神田外語大学・外国語学部・教授

研究者番号: 00364919

平成25年度は、研究分担者

(4) 研究協力者

全 京秀 (CHUN, Kyung-soo)

中国・貴州大学・教授

林 玉茹 (LIN, Yuju)

台湾・中央研究院台湾史研究所・研究員

松田 良孝 (MATSUDA, Yoshitaka)

フリー・ジャーナリスト